

Book Review

歯科衛生士のための 歯科診療報酬入門 2018-2019

公益社団法人日本歯科衛生士会 監修
鳥山佳則・石井拓男・武井典子・金沢紀子・吉田直美 編集

Reviewer

荒川真一 Shinichi Arakawa

(東京医科歯科大学大学院生涯口腔保健衛生学分野)

B5判, 262頁
定価(本体3,700円+税)
医歯薬出版刊



「森を見て木が見えず」からの脱却

現在、歯科界以外からも歯科衛生士の重要性が認識され、歯科診療所のみならず病院、介護施設での雇用の増大が見込まれている。歯科衛生士業務の専門性とその法的な理解が深まり、1990年の診療報酬改定で点数表に初めて「歯科衛生士」が記され、1992年改定では「歯科衛生士による実地指導加算」が保険点数で明確に評価され、1996年にはついに独立した診療科目となった。さらに、多職種連携(患者協働)が注目され、2012年に「周術期口腔機能管理」が収載、2018年に改定された。超高齢社会を反映して、介護保険報酬においても「居宅療養管理指導」が歯科医療機関で請求可能となり、保健医療機関施設基準に準じて介護施設においても配置基準が設定され、口腔衛生管理体制加算、口腔衛生管理加算の算定基準が緩和されている。

上記の状況下、2017年に初学者を対象として診療報酬についての基本ルールや各項目に対して「やさしく」「ていねい」をキーワードに、入門書として発刊され、2018年の診療報酬改定に伴い2018年版が上梓された。あえて第2版ではなく、あらためて第

1版としたところに、鳥山佳則先生はじめ編集者の意気込みが感じられる。

今回は特に変更の大きかった在宅医療、算定ルールが難解な周術期等口腔機能管理について「わかりやすく」をモットーに編集されたとのことである。

まず、総論計5章の内4章、各論に至ってはすべての項目を鳥山先生が執筆されている。鳥山先生の労力は大変なものであったことは想像に難くない。しかし、これは総論・各論ともに同一の思考経路で記述されていることになり、読者にとっては難解といつてよい算定ルールについて本書に記された道標・経路を辿っていけば目的地(本質的な理解)に到達し、さらに実務に活かせることになる。大学卒業後厚生省(当時)に入省され、医政局歯科保健課長や保険局歯科医療管理官などを歴任された鳥山先生だからこそ成しえた「偉業」というべきものと考えられる。

日本歯科医師会発行「社会保険歯科診療報酬点数早見表」は便利ではあるが、特に初学者にとっては「木を見て森を見ず」ならず「森を見て木が見えず」状態になっているのではなかろうか。本書は「歯科衛生士のための」と付記があるように歯科衛生士が関わる業務が焦点となっているが、総論部分で

は歯科診療報酬の philosophy および基本的ルールが記されている。この部分だけでも若い先生方の入門書となり、ベテランの先生にとっても必読書とも言える。チーム医療の基本は歯科医師と歯科衛生士であるが、大きな力を発揮する歯科衛生士の「仕事」を必ずしも理解できていない場合が往々にある。評者自身も、歯科衛生士養成教育に関わって初めて上記を認識した次第である。本書は、現在進行形の歯科医療を反映しており、かつ歯科衛生士が関わる歯科業務全体を俯瞰して書かれており、お互いの理解のためにも有用である。さらに、QOLの向上・健康寿命の延伸の観点から、社会からその実力を発揮することが強力に求められている歯科衛生士を実務レベルで理解・認識することは、貴院・貴病院にとって、社会責任を果たす意味でも、他との差別化を促す意味でも重要なことと考える。

今後も点数の改定に沿って改版されると思うが、基本的な考え方は不変であり、単に診療報酬の算定のみならず、点数設定の目的、換言すれば社会からどのような歯科衛生士の業務が求められているか、なども考えることができる歯科医療従事者に必携のバイブルと考える。